くらふち通信

第　29　便
2025.2.1

塩田平民話研究所
〔事務局〕
長野県小県郡
青木村大字当郷
2072番地2
☎0268-49-1231
✉shiodadaira.minwaken@outlook.jp
http://www.shiodadaira-minwaken.net

# 閑話休題 ―女桃太郎・考―

塩田平民話研究所　所長　稲垣　勇一

最近、ひょんなことから「女桃太郎」の話についてちょっと足を止めてみる機会をもった。もちろんそれが全国にいくつか点在していることは知っていた。けれどもそこに〝はて？〟と留まってちゃんと向き合うことをしないできた。

さて、讃岐（香川県）に代表的といわれる「女桃太郎」の話がある。それなりに注意して見ていくと、興味津々の内容がいくつかあって、近頃呆け気味な感性がいま目覚めはじめている。取り分け考えたい三つ四つの重要と思われる内容がある。しかし紙面の都合で、ここではただ一点について触れるに止どめる。

讃岐の女桃太郎は桃の実からは生まれない。桃の実を食べて若返った爺婆から元気な女の子として誕生する。男桃太郎のような異常出生譚でもなければ小さ子話でもない。人の子が生まれる普通の手続きを踏んで、人間の女性から生まれた普通の女の子だ。ただ鬼に攫われないように名前も外見も男の子のようにして育てられただけである。それに対して、桃から生まれた男桃太郎は、物語の発端からすでに英雄譚の主人公となることを運命づけられている。異常誕生児だからである。

男と女の究極的な生理の違いは、子どもを産めるかどうかに帰着する。誕生した命へのいとおしさ・不思議さは、生物学的出産メカニズム理解で納得することをはるかに越えている。生まれたばかりの嬰児の前で、男はその初々しさ可憐さに真底感動する。そしてその思いは日増しに強まり、嬰児との具体的な接触を通して、命の尊さを感覚として自身の身内に育てる。けれど間もなく、生命誕生という重大事のほとんどを女が担っていたことにも気付かされる。男たちは女への敬意と同時に嫌応なくコンプレックスもまた抱かざるを得ない。それを補うために、男たちは女たちを強引にねじ伏せるのに、かつて、産む行為を「血穢」という宗教的記号に結び付けて貶めた。産屋という見るなの部屋の装置だ。

女桃太郎は貧しい爺婆の子として集落の中でまずは普通の子として育つ。それはその後の彼女の行動を男桃太郎とは決定的に異なるものにしていくのだ。

桃太郎神社（香川県高松市鬼無）

## 木霊

私は2月5日生まれ。小学校低学年頃だったか、誕生日の朝TVの中の人が「今日から春ですね」と笑顔で語りかけてきた。「立春」だったのだ。私は嬉しくて誕生日を聞かれると「立春の日です」と自慢げに答えていた▼ただ翌年もその次も立春は2月4日だった。定気法という二十四節気を配置する方法によると「太陽黄経が315度の時」とある。…難しい。ちなみに今年は2月3日だ▼話は変わるが、昨年はアメリカ大統領選挙が大きなニュースだった。出来の悪い映画を見せられているような気もしたが、我が家で話題になったのが投票日の日程。火曜日ということに驚いた。1845年の連邦法で「11月の第1月曜日の翌日の火曜日」と決まっているのだそうだ。当時、有権者の多くが農業に従事するキリスト教徒だったため、収穫のピークや日曜日を避け、さらに遠方から馬車などで投票所に行くため火曜日にしたそうだ▼体育の日や成人の日が月曜日に統一されて随分たつ。連休になるという合理性を選んだのだが、なぜその日が祝日なのかの意味を忘れないようにしたい。

（恵美子）

## 狐ばなしと山里の暮らし に 焦点を当てて

# 第3回「民話語りっこ学びっこ」開催

「民話 語りっこ 学びっこ」と銘打った塩田平民話研究所主催の民話のつどいを始めて3年が過ぎた。民話の〝語り〟と講演に特化した催しになっている。民話の伝え方には様々な方法があることは承知の上で、研究所としてはこのスタイルにこだわってきた。

昨年来 千曲川右岸 真田地域の民話に目を向け、今年は〝狐ばなしと山里の暮らし〟に焦点を当てた。

予定していた交流会は、語りの時間の終わりに、短時間で行った。

## 学習講演会「狐ばなしと山里の暮らし」

講師　稲垣勇一　所長

昨年から、千曲川左岸の民話を平地仏教文化民話圏、右岸の民話を山里神道文化民話圏と分類し、主として真田の民話に視点を当てて研究してきた。

山里神道文化民話圏を垂直方向で見ると、中心には高く深い奥山がある。神が坐す場であり、生命の源となる水源がある。人が立ち入ることは許されず、畏敬の念を込めて祈りを捧げる対象とされる。

奥山の下には里山がある。里山には異界との境界が含まれており、天狗・鬼・河童・小豆とぎなど妖怪が棲む異界と、動物や人が住む領域とに分かれている。狐・狸・猿・蛇などの動物は、異界のものと人とを結びつける役割も果たす。ここには、宗教者・芸能人・技術者など、定住せず自由に旅する特別な存在の人々がいる。

里山の麓には、山里が広がる。人々が田畑を耕作し定住している。人が死ぬと祖霊となって里山に帰る。里山と山里の堺に建てられた墓は里の方を向き、死してなお村人を守っている。死んで33年経つと、神となって奥山へ入るのだという。

神おわす奥山。異界のもの、動物、人が交錯する里山。その麓で営まれる山里の暮らし。狐は、時に化け、化かし、いたずらをして人を困らせる。しかし、真田では、人々のおおらかで温かな気質に包まれて、両者が共存している話が多い。真田の民話の特徴の一つである。

山里 真田だからこそ生まれた天狗や鬼・狐の話を、そこに暮らす人々の視点から捉え直したい。（弘子）

## 民話 語り

六合の文化を守る会の語り手をお迎えして、九話の民話の語りに耳を傾けた。小学生から大人まで背景も年齢も様々な語り手による「山里の暮らし」「狐」に関連した民話だった。六合の文化を守る会の皆さんの人柄がにじむような語りに心が温かくなった。キッズたんぽぽさんの語りは、さわやかな声が心に残った。所員は「狐」に関連した民話であったが、人と狐の関係を温かくとらえて語り継いできた昔の人の暮らしを彷彿とさせた。

私も狐の民話を語らせていただいたが、実は、人を騙してつんとすましている「狐」がどうも好きになれず、「さて、困った」と思っていた。

「語る」ということは、民話をからだの中に入れるような作業でもある。民話学習会で「狐」と民話の背景について学び合い、互いに語って聞いて、振り返った。語り手として「狐」に込められた人々のメッセージを考えるうちに、「狐が好きになった」のである。

山里に暮らした人々に心を寄せた民話発表会であった。（寛恵）

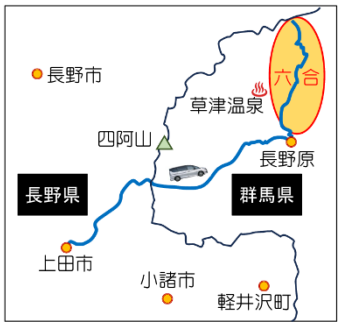
# 民話探訪 六合（くに）を旅する

六合の文化を守る会と親しく交流させてもらうようになって久しい。このところ毎年、「民話語りっこ 学びっこ」に参加していただいている。

昨年8月、六合の文化を守る会の活動基盤、群馬県中之条町に合併した旧六合村を塩田平民話研究所のメンバー7人がワゴン車に乗って13年ぶりに訪ねた。うち3人は初めての訪問。鳥居峠を越えて群馬県に入り、長野原から北上し、3時間の行程。四阿山系の山並を隔てた山間の地で、かの地に息づく民話を守り伝えている。

有朋自遠方來、不亦楽乎。

六合は、明治の合併によって小雨・赤岩・生須・太子・日影・入山の六箇村が統合された際の村名。203㎢、1665人が暮らす村だった。（弘）




八月の濃い緑に覆われたつづら折りの山道を一路六合へ。六合民話の家 ねどふみの里で山本茂先生の穏やかな笑顔に迎えられました。山本先生の説明を受けながら民話の家に入り、一つの物に目が留まりました。「病人駕籠」という竹で編んだ粗末な駕籠。車などの交通手段のない昔は富山の薬で凌ぎ、いよいよこの駕籠に乗せられて草津の町の病院に行く時は、もう二度と帰って来られない死出の旅だったといいます。駕籠に乗せられていく本人は、見送る家族は、どんな思いだったでしょう。

次の目的地に向かう途上の川風呂 尻焼温泉では人々が入浴を楽しみ、空にはたくさんの赤トンボが飛び交っていました。今は穏やかな山間の暮らしの中に、こうした人々の厳しい生き様があったことを忘れてはならないと思いました。（和枝）

大仙の滝はマイナスイオンをたっぷりと感じられる気持ちのよい場所でした。滝見ドライブインの片隅には左手に幼子を抱えたお地蔵さんが立っていました。貧しさ故に間引きされた子どもたちの霊を慰めるために建てられたんだとか。静かに佇むお地蔵さんの頭の上に赤とんぼが飛んできて止まりました。遠くない昔にあったことを思うと、しみじみとした気持ちになりました。

暮坂高原オートキャンプ場では六合の文化を守る会の中沢さんご夫妻が温かく迎えてくださいました。緑豊かな場内を散策しながら「半右衛門の泉」のお話などを聞いていると、太陽の光が注ぐ中、糸のような細い雨が降ってきて、「狐の嫁入りだね～」と声があがり、不思議で幸せな時間でした。（紗衣）

旧太子駅は、戦時中、資源の乏しい日本で鉄鉱の輸送を支える拠点となった駅です。今は、ホッパー棟やホーム、駅舎が復元されています。案内してくださった山本さんは、突貫工事のために多くの朝鮮人が連れてこられ、冬でも薄着で働かされている光景を目にして、かわいそうだったと話されました。ここでも、多くの朝鮮人の犠牲があったことを知り、心が痛みました。

次に向かった赤岩集落は、養蚕の里として知られており、今でも養蚕農家住宅や蔵、観音堂、毘沙門堂などの伝統的建造物が数多く残っています。二階・三階からせり出している出梁に欄干を設けている家が多いのは、養蚕の道具を置くためだったと山本さんが教えてくれました。江戸時代から続く静かな山村集落を歩いていると、民話の世界が息づいているように感じられました。（陽子）

# 民話とわたし Ⅲ

## ―それは勘違いからはじまった―

塩田平民話研究所友の会員　中村 仁志

私は、小学校で司書教諭を担当している中村仁志と申します。新卒一年目の時のことです。私は、飯田市立上郷図書館で一枚のチラシを手にとりました。それは、「お話の講習会」のチラシでした。口べたな私は、スピーチの仕方などを教えていただけることを期待して、その会に参加しました。すると、館長さんがおはなしのろうそくに火を灯し、「おいしいおかゆ」(グリムの昔話)を語ってくださったのです。私は、昔話の語りを初めて聞きました。お話を聞き終えた私は、「おもしろかった」という気持ちと共に「私も語りをやりたい」と強く思いました。今でも、館長さんの言葉とその時の図書館の景色が私の心の中に残っています。それから三十年の月日が経ちました。私の将来の夢は、「語りのおじいさん」になることです。その日を目指して今日も昔話を楽しんでいます。

# ふるさとの民話探訪24 金縄山 実相院

角間の鬼と深い関係がある真田町傍陽の実相院を訪ねた。

その昔、人々を苦しめた角間の鬼を観音様の加護によって退治できたことに感謝し、坂上田村麻呂が観音堂を建てたと伝わる。鬼の首領 毘耶(邪)王を捕え、金の鎖で縛りつけたことから山号を金縄山と改めたという。

広々とした寺の境内から見上げると、小高い崖の上に迫り出すように懸崖造りの観音堂が建っている。急な石段がお堂に向かって真っ直ぐに伸びる。住職からお堂が開くのは年に一度、大般若の日だけとお聞きし、4月17日に再び訪れた。

1783年(棟札によれば(1800年)に再建された観音堂の内陣中央上部の開いた扉の中に、寺の本尊馬頭観音座像が納められていた。

寺伝によれば、725年、寺の開基行基によって彫られたと伝わるが、現存仏は平安末期の作。この観音様のお蔭で真田の人々に平安な暮らしがもたらされたのかと思いながら手を合わせた。

馬頭観音座像は、3／9までサントミューゼ 上田の仏像特別展 で拝観できる。

実相院の境内には、鬼石や鬼松と呼ばれる鬼を封じ込めた大石と松があったが今はなく、本堂脇の池のほとりに古い石塔を載せた苔むした石があり、わずかに鬼石の名残を留めている。

鬼とは何だったのか。観音様を祀ってきた人々の思いは…。学びは尽きない。

(弘子)

# 事務局だより

巳年に因み、「小泉小太郎」に登場する大蛇噺がいくつものメディアで取り上げられました。

◎『しんぶん赤旗』元旦号「縄文から現代へ ヘビにこめた庶民の祈り」

◎『東信ジャーナル』シリーズ「『巳』の民話・伝説」

◎『上田ケーブルビジョン』1/15放送「UCVレポート」

# 編集後記

嵯峨信之 作「ヒロシマ神話」の詩が、長いこと中学三年生の国語の教科書に載っていた。14年前の東日本大震災によって、原発の「安全神話」は脆くも崩壊した。原爆や原発の脅威は、既に現代の「神話」と化している▼昨年暮れ、長い間核兵器廃絶の運動を続けてきた日本原水爆被害者団体協議会が、ノーベル平和賞を受賞した。これを機に、日本政府が核兵器禁止条約を直ちに批准することを期待したい▼元旦、一年前の悲劇が蘇る。復興途上の能登は、9月にも大雨で被災した。支援の手は、東日本大震災以上に行き届いていない。地球が病んでいることは、最早誰の目にも明らかだ。「50年・100年に一度」の災害が、いつの間にか「千年に一度」と言われるようになった▼一方、世界中で、戦火が止むことなく拡大し、罪のない何万もの命が奪われ続けている▼文明は、命を奪うことを遠ざける道を選んできたのではなかったのか。どれだけの命が抹殺されれば、真の平和に近づけるのか▼命を粗末にする「神話」を再び作ってはならない。人の温もりを紡ぐ「民話・昔話」こそ語り続けたい。

(弘)